

博士論文要旨

| | | | |
|--|--|----|------|
| 学籍番号 | 1221002 | 氏名 | 葛谷玲子 |
| 論文題目 | 当事者の視座を基盤とした精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践能力と現任教育のあり方 | | |
| <p>目的：本研究は、地域で生活する精神障害のある当事者のリカバリーの経験や考えを明らかにすることを通して、当事者の視座を基盤とした精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践に必要な能力を明らかにするとともに、リカバリー志向の看護実践に向けた現任教育のあり方について検討することを目的とした。</p> <p>方法：調査1では、リカバリー志向の看護実践と現任教育の現状と課題を明らかにするために、単科精神科病院の看護部教育責任者（71名）への質問紙調査を行った。調査2では、リカバリーの経験や考えを明らかにするために、地域に住む精神障害のある人13名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューより明らかとなったリカバリーの経験や考えに基づき、看護実践に必要な能力を検討した。そして、精神看護専門看護師らの意見を踏まえて「精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践に必要な能力と教育方法（案）」を作成した。調査3では、案について、当事者と精神保健福祉士からの意見を収集するためのグループインタビューを行い、「必要な能力と教育方法」を修正した。調査4では、現任教育上の課題を明らかにするため、修正した「必要な能力と教育方法」に関して調査1と同じ対象者への質問紙調査を行った。本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した。</p> <p>結果：<調査1>有効回答者14名のうち3名はリカバリーについて「よく知っていた」と回答し、8名は「少し知っていた」、3名は「今回初めて知った」と回答した。リカバリー志向の看護実践の阻害要因として〈問題に焦点化した看護〉や〈患者の高齢化〉等が挙げられた。<調査2>リカバリーは、【他者との関係とサポート】【目標や変化に向けた挑戦や取り組み】【日常生活】【社会的活動・役割】【アイデンティティ】【精神状態と健康面のセルフケア】の6つ側面で経験された。<調査3>看護実践に必要な能力として挙げた17項目の行動目標について、当事者から《精神科では看護師の数が少なく忙しくて患者とゆっくり話すことが難しいと思う》、《行動制限などの経験において人権に配慮されていないと感じるような環境や看護師の不十分な対応がありトラウマになっている》等の意見があった。<調査4>有効回答者14名から、[リカバリーに対する認識が低く、基本的な概念も知らないスタッフがいるため、「リカバリーの視点での対象理解」から知識をつけていく必要がある]等の意見があった。</p> <p>考察：精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践には、入院している人が自分の人生について話をしたいと思えるような関係性を構築する能力、非自発的入院や強制的な治療の経験が権利侵害やトラウマにつながることを理解し倫理的に考え行動する能力、入院している人を「地域生活を送る権利をもつ生活者」として理解しアセスメントする能力、入院している人を含めて当事者のもつ力を信じて協働する能力、入院している人の固有の人生を尊重したうえで今後の人生について一緒に考える能力、地域生活への移行を見据えて心身両面のセルフケアを高めるために支援する能力、看護師にある前提や価値観を問い直し看護を変えていくために内省する能力が必要である。また、現任教育としては、ひとりひとりの事例に焦点を当てて病院・病棟以外の専門職・非専門職の人々と一緒に考えていく方法、経験に基づく知識をもつ当事者から学ぶ姿勢をもち、対象理解や看護の検討を一緒に行うなど当事者の力を活かした方法、自施設の組織文化を踏まえて看護を再検討する方法などが有用だと考える。</p> | | | |

(別記様式 7)

番 号 :

令和 6 年 2 月 13 日

令和 5 年度博士論文審査結果報告書

| | |
|-----|--------|
| 主 査 | 梅津 美香 |
| 副 査 | 森 仁実 |
| 副 査 | 奥村 美奈子 |

令和 5 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号 : 1221002

氏 名 : 葛谷 玲子

審査結果 : 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「当事者の視座を基盤とした精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践能力と現任教育のあり方」は、精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践に必要な能力を、地域で生活する当事者のリカバリーの経験を踏まえて明らかにするとともに、リカバリー志向の看護実践に向けた現任教育のあり方を追究した研究である。

学生は、リカバリーを自覚している当事者への面接調査により当事者が経験したりリカバリーの経験を分析し、その特性を軸に、精神科長期入院患者に対するリカバリー志向の看護実践能力について、文献や精神科看護専門看護師らの意見を踏まえて案を導き、当事者らの意見を踏まえて修正を加えた。確定した「必要な能力と教育方法」に対する単科精神科病院の看護部教育責任者の意見から、必要な能力は妥当であるが教育方法については課題があると捉えた。以上の過程から、導いた看護実践能力は、人権が侵害されやすい環境にある入院患者の権利を擁護する看護職の役割を支えるために重要であり、現任教育のあり方としては、多角的視点で事例を検討するため外部の専門職や当事者の力を活用する方法、自施設の組織文化を踏まえた看護の再検討が有用であるとし、今後は臨床現場での実践的な研究が必要になると考察した。

本研究は、精神科病院における看護の質向上に不可欠な現任教育で高めるべき看護実践能力について、権利の主体である当事者の視座をもとに明らかにしており、実践的な研究を推進するための基盤を成す知見として価値あるものであると考える。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に2回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。